２０２２年８月２１日（聖霊降臨後第１１主日、特定１６、C年）
牧師メッセージ
「今」
（ルカによる福音書14:1, 7-14）

司祭ヨセフ太田信三

神の国の戸口は狭く、主人によっていつ閉じられるか分かりません。閉じられた門の中では宴が催されます。そこにはアブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たち、そして東西南北からの人々、つまり異邦人が宴席についています。しかし、「不義を行う」者たちは外に投げ出され、歯ぎしりするしかありません。閉じられた門を叩いて懇願しても、主人から、「お前たちがどこの者か知らない」と言われてしまいます。彼らは滑稽にも、「一緒に食事をしたことがある」とか、「広場であなたから教えを受けた」とか、まるで有名人に取り入ろうとするようなことを並べ立て、主人との関わりを強調します。しかし、主人は「不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」と拒絶されます。

「不義」という言葉の意味は、相手に対して誠実さを欠くことであり、相手との関わりを軽んじ、ふさわしい態度をとらないことです。義を欠いているなら、一緒に食事をしようが、広場で教えを聞こうが、それは場所と時を共有しただけで、真の交わり、関係を築いたことにはなりません。たとえるならそれは、神のことを熱心に勉強していながら神を忘れている神学者であり、礼拝をささげていながら、他者への関心を失っている教会員といったところです。

主イエスは「狭い戸口から入るように努めなさい」と言われます。「努める」と訳されている単語は、「スポーツ選手が戦いに勝つために身体を鍛える」ための「努力」を意味します。主イエスが求めていることは、競技者が将来の勝利を目指して「今」努力するように、「今」自分を鍛錬することです。それは「今」をどう生きるか、主の招きに「今」ふさわしく応答するか、ということです。神の国への門を通れるか通れないかは、出自やこの世的な業績によるのではありません。むしろ、今日のシラ書にあるとおり、そのようなものに頼り、誇って、神を見失う慢心こそが戸口を狭くしてしまいます。「今」主イエスの招きに応えているか、悔い改めて主の方を向いているか、日々その信仰に生きているか、そのことが問われます。戸口がいつ閉じられるのかは分かりません。しかし、主イエスが語りかける「今」は、いつでも誰にでも開かれています。

神は「今」、わたしたちを招いておられます。「今」をわたしたちはどう生きていているだろうか。主の招きを無下にしていないだろうか。不義を犯していないだろうか。あらためて「今」、神に心を開き、主イエスとの交わりに生きるよう鍛錬しましょう。招きに応えるかどうかは、わたしたち次第です。「今」神の愛をいただき、「今」神を愛し、人を愛して生きることができますように。